

2014. 3. 31/ Vol. 45

1880年代教育史研究会 ニュースレター

第 45 号

目 次

[終刊挨拶]

荒井 明夫 「1880年代教育史研究の成果と今後の研究課題」・・・ 2

[連載]

神辺 靖光 「学校をめぐる逸話と風景(19)
藩校と明治初期の校舎(その2)」…………… 3

[個人研究]

谷本 宗生 「なにが課題として残されたか——私の問題意識——」・ 4

田中 智子 「第三高等中学校大阪商業科分校考
——「商都大阪」の淡くはかなき夢——」…………… 5

小宮山 道夫 「九州地区から東北地区研究へ、
そしてその先の展望をめざして」…………… 7

鄭 賢珠 「文部省廃止論から問う近代日本教育の位相」…………… 8

[史資料紹介]

富岡 勝 「東京大学駒場博物館を再訪して」…………… 9

[活動記録]

三木 一司 「ニュースレター総目次(第25号～第45号)」…………… 11

小宮山 道夫・富岡 勝 「1880年代教育史研究会活動年表
(2008年9月～2014年3月)」…………… 14

[お知らせ]…………… 16

[終刊挨拶]

1880年代教育史研究の成果と今後の研究課題

研究会代表・荒井 明夫

1880年代教育史研究会発行の『一八八〇年代教育史研究年報』第5号で既に公表したように、本会は、2013年度をもって解散することとした。本ニューズレターの読者をはじめとして、長年にわたり御支援・御協力・御教示頂いた皆様方に感謝申し上げたい。『一八八〇年代教育史研究年報』第5号でも大まかに成果と課題に触れているが、視点を変えて具体的に成果と課題をまとめてみたい。

第一は、共同研究のスタイルの確立という点である。本研究会は、発足直後から年に2～3回の研究会例会を開催し、「ニューズレター」を発行、2009年からは『一八八〇年代教育史研究年報』を毎年刊行し続け、研究会会員の成果を精力的に発表してきた。2010年度からは独立行政法人・日本学術振興会による科学研究費補助金を受けてきた。こうした共同研究のスタイルは、大学をめぐる研究環境激変の中で一つのスタイルを構築できたのではないかと思う。教育史研究で今求められている点は、個人研究の進展はもとより、個人では成し遂げられない大きなテーマを共同研究で深めることだと考える。本研究会は、共同研究のスタイルを構築できたと思う。

第二は、本研究会の目的は、日本教育史上の一大画期とされる森文政を1880年代を通じて展開された政策、その間に様々な立場から提起された制度構想、1886年諸学校令で実現した諸制度と初代文相森有礼の教育思想と構想、をひとまず腑分けして位置付け直し、その歴史的意義を問い直すことにあった。残念ながらこの目的は残された最大の課題である。

研究会が発足直後から最も力を入れた課題は、高等

中学校研究である。高等中学校を帝国大学に接続する学校として捉えるのではなく、地域史的視点から捉え直すことにあった。それを通じて高等中学校の設立と機能を解明し、中学校であることの意味を明らかにし、高等中学校を1880年代の教育政策および制度構想の帰結として位置付けようとした。その結果、全7校の史料調査をほぼ終え、研究成果は会員の著書や論文として公表し、従来とは全く異なる高等中学校像を提示できたと自負している。

第三に、残された課題を列挙したい。学校体系に即して整理すると次のような課題が重要となる。(イ) 1880年の第二次教育令改正を受けて本格化する小学校への就学政策の展開を地域ごとに解明する課題である。特に就学告諭の時代から本格的な就学督責の時代へと展開するのが1880年代である。その連続と非連続を解明する必要がある。(ロ) 次に、小学校を了えた若者の社会的移動を解明する課題である。初等中学校が各地で勃興しながら「正格化」政策の展開で淘汰されていくのも1880年代である。各府県に即して、あるいは各個人の動きに即して具体的に明らかにする必要がある。(ハ) 高等中学校へと連続していく各地の医学校や専門学校の実態と改廃である。同じく、中央に設立された工部大学校や東京農林学校などの実態解明もある。(ニ) そして高等中学校全七校を対象とした全体像の分析である。とりわけ、教育内容と方法、教育課程と府県尋常中学校との接続なども最重要の残された課題である。

研究会は解散してもこれらの研究課題が残されている。研究会会員一人一人はこの点を十分自覚している。

[連載] 学校をめぐる逸話と風景 (19)

藩校と明治初期の校舎 (その2)

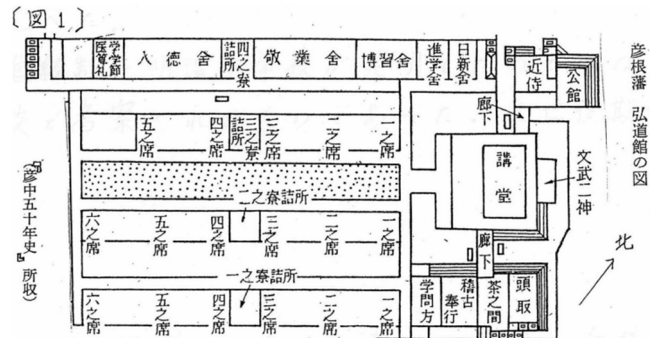
神 辺 靖 光

前回、左右五ヶずつ並ぶ岡山藩校の学舎が、明治の進級制授業に適応したから、旧藩校校舎が連続的に中学校の校舎に用いられたことを述べた。

進級制は明治の学校が発明したのではなく、藩校で考案されたものであった。近世後期、時勢の危機感から多くの藩が、家柄、血統でなく、学力で人材を選抜しようとした。藩校はそのための施設、機関となり、それまでの儒者の儀礼的講釈を聞く授業から、生徒一人一人の真剣な学習の場に変質していった。藩は生徒の学力を考査するため、春秋二回の試験を設けた。生徒はこれに向けて勉強するのだが、進遅、優劣の差は如何ともし難い。そこで先進、遅進別に一級、二級、三級等とグルーピングし、試験の結果によって、進級、留級させるという進級制を考案した（グループ名は藩によって異なる）。

進級制が定着すると、儒者の講釈を聴く、一つの座敷だけではやりにくい。そこで講釈を聴く場所を講堂として、他の広い座敷を区切ったりしてグループ別学習を行ったが、やがて、廊下の片側に小部屋を並べる校舎を増築するようになった。城下に徒士(かち)長屋があったし、藩邸に長屋風の勤番侍部屋があったから容易に発想できたろう。

幕末の藩校にはこのような校舎が次々に建てられたが、典型的な彦根藩弘道館の校舎・教室配置図をあげよう（〔図1〕）。これは寛政10（1798）年、彦根城廓内にできたもので、この校舎の周囲に、剣術、槍術の道場や弓の稽古場が立ち並ぶが、それらは省略した。



東から西へ、一之寮、二之寮、三之寮、四之寮と4棟の校舎が建てられている。一之寮と二之寮は素読生（小学校レベル）の校舎で各6席は学級に当る。初学者は先づ一之寮一之席に入り、順次二之席、三之席～六之席へ進級して試験を受ける。合格すれば二之寮一之席に移り、同様に進級して三之寮に進学する。三之寮、四之寮は専門学科で、席を移動する進級は変りないが、輪講、会読等、学習方法に変化がある。

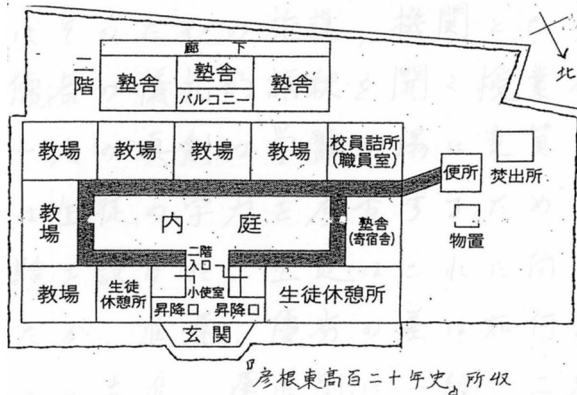
彦根藩弘道館の進級制は席から席へ、寮から寮へ移りながら完結されるのである。この藩校校舎はまさに進級制のために工夫され、つくられたものである。

明治11（1878）年、広島城下に浅野学校が建てられた。旧藩主・浅野氏が建てた私立中学校である（現広島修道大学）。この校舎は南側の廊下に沿って5箇の教室が一行に並んでいる。進級制をとる明治初期の典型的な中学校校舎である。

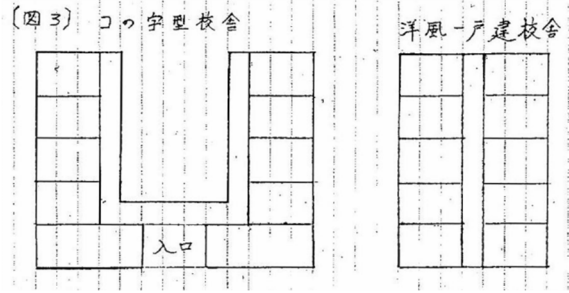
彦根藩校弘道館は明治5年に廃止になり、校舎は西本願寺に買収されて、その教校になった。明治9（1876）年、彦根城下、士族達の熱望により彦根学校が開校した。この学校は教員伝習所になったり、公立中学校になったりして、滋賀県尋常中学校になるものだが、

〔図2〕にみるように、口の字型である。内庭の回廊に沿って6教室ある。進級制をとっている。

〔図2〕明治9年 彦根学校・彦根伝習学校校舎図



この時期、ヨーロッパの中等学校（例えばギムナジウム）のような口の字の校舎を持つ中学校は少ない。管見の範囲では明治17（1884）年新築の東京府中学校ぐらいである。多くは、浅野学校のような一直線のハモニカ風か、〔図3〕にみるコの字型か、洋風一戸建である。



いずれも同面積の教室が廊下に沿って、或は廊下を囲むように並べられている。進級制の授業が行われたこと歴然である。

われわれは、同面積の教室が並ぶ校舎を見慣れているから、生来のものと思いがちであるが、これは進級制の発達によって藩校で工夫され、明治の学校が継承したものであった。

〔個人研究〕

なにが課題として残されたか——私の問題意識——

谷本 宗生

本研究会も科研費の助成期限が残り僅かとなり、この年度末に閉会となる。私自身、この研究会で皆とともに学び、とても多くの知見を得て成長することが出来たと思う。ただ研究者として冷静に振り返って、残された研究課題を原点に戻っていかに考えるかがとくに重要であろう。この点は、本会の代表にとどまらず、私も含め会員一人一人が自身の問題として問われるべきものかと思う。

そのなかでもとくに、高等学校の教育実態については、残念ながら本会ではほとんど分析するに至らなかったといえる。これはたんに残された資料の制約が大きいからだと断定出来ない。資料の有無にとどまら

ず、教育実態をいかに分析考察していくかといった研究上のアプローチを相応に定める必要があったと思う。高等学校の教育カリキュラムがどのようなものであったか、これをたんに科目名や授業時間数だけ比較してみてもあまり有効だとは想像出来ない。どんな教員がどういった授業を実際に行ったのか、ナンバースクールと呼ばれる高等学校が同一科目を開講しても、おそらくは担当教員らの考えや教育能力の違いなどによって学校ごとの相違（学校の特徴）がきつと生じていたのではないかと感じる。もちろん用いた教科書や授業スタイルだけでなく、担当教員らの性格や情熱も含めた教育のヒドンカリキュラム面をいかに捉えるか

がとても有効なポイントだと想像する。

本会閉会後のこれから各会員らは独自に研究を展開していくことになるが、私は同上の指摘とおり、教育実態の分析について独自にアプローチしてみようと考えている。どの高等中学校も教育的には相違はなかった（同じであった）という従前の通説？を批判検討していくことになるだろうと思う。もちろんかにその教育の違いがあった場合でも、その違いを当初から想定したものか、副次的な結果によるものか、より大局的に考えなければならないであろう。また学校ごとの卒業生らの動向を、傾向的にまたは抽出的に把握する必要もあると感じる。たとえ帝国大学への進学が前提であったとしても、彼ら卒業生らの動向をいかに捉えるか、教育の効果としても人間形成の点からみても大いに興味深い点であると思う。

高等中学校の教育が尋常中学校の教育課程を踏まえたものであり、高等中学校の卒業生の多くは帝国大学

へ進学している。たしかに尋常中学校と高等中学校の関係性（教育上の接続）は重要な鍵と認めるが、果たして高等中学校→帝国大学の流れは、従前の大学予備門→東京大学の流れと同様なものであったと安易に考えてよいのであろうか。帝国大学が高等中学校に対して、なにがしか学生を受け入れる帝国大学として必要な教育水準などの要求をしていたのであろうか。もちろん、それに対して高等中学校も容易にすべて従ったのか、はたまた応相談のうえ要求に対応していったのか、いやそもそも帝国大学から高等中学校への教育要求はあまりなかったのか、その場合は高等中学校の教育を全面的に支持信頼していたからなのかなど、高等中学校と帝国大学との関係性も今後さらに明らかにすべき検討課題である。高等中学校の教育をみるにしても、考える視点・視角は多様であろう。

[個人研究]

第三高等中学校大阪商業科分校考——「商都大阪」の淡くはかなき夢——

田中 智子

教育史の世界との懸け橋、自分の研究のペースメーカーの役割を果たしてくださった本研究会には感謝の念が尽きないが、1880年代教育史という枠組みのなかでも、やはり高等中学校制度、特に京阪神を中心とした第三区構成府県との関わりについて、研究成果を披露させていただいてきたとの感が強い。最後にその初心に立ち返りたい。

京都府が高等中学校制度の受容・活用に踏み切った一方、大阪府はこの新制度に対してつれない態度をとり、結果的に第三高等中学校の京都移転を招いたという理解は、以前から対比的な通説となってきたといえ

る。自分自身もこのような捉え方を踏襲し補強してきた。

しかし、そのような枠組みに当てはまらない動きや意識も存在したことが、つい最近の史料収集作業のなかで判明した。第三区とは無関係な福岡で発行されていた地方紙を検索していたところ、次のような記事に偶然めぐりあったのである。

○高等中学校敷地検分 第三高等中学校を何れへか移転せらるべしとの噂は兼て聞ける所なるが、果して左る計画のある事と見え、同校長中島永

元幹事平山太郎の両氏には、移転地検分の為め、去る六日の午後より京都二条城其他葛野郡等持院村等に赴き、帰途吹田其他を巡覧したるうへ、翌七日午後八時過帰坂せられしが、其移転先きハ粗ぼ京都と決したるが如しと云ふ者あり。此説をして真ならしむれば、当府民ハ折角得たる利益を他人に奪去らるゝ憾あるを免かれざれば、府下有志の人々ハ奮て当府下に好地位を撰み、永く該校をして此地にあらしめ、今日現在の学科の外に完全なる商業科をも此校中に設け、我国第一の商業都会たるに耻ぢざる府民を養成するの経画あらん事こそ望しけれ（本年十一月九日内外新報）。

（『福岡日々新聞』明治十九年十一月十二日、句読点は田中。）

『内外新報』は、福地源一郎らによって結成された立憲帝政党系の新聞として、1882年4月より大阪で発行された『大東日報』を前身とする。原敬が主筆を務めた『大東日報』は、帝政党の解散以降も政府系の独立新聞として存続し、1885年に5月15日に『内外新報』と改題して、1887年4月8日まで刊行された。現在のところ、原紙なりマイクロフィルムなりで検索できる機関はないように思う。

上記の『福岡日々新聞』は『内外新報』記事を転載したものであるが、従来描かれてきた「高等中学校に未練がない大阪」像とは異なる一面が伝えられている。

第三高等中学校を京都に奪い取られるようなことのないように、大阪府下に適当な移転地を探し、いわば「日本一の商都」に恥ぢない「商業科」を設置するべきだと述べているのである。

中学校令第三条は、「高等中学校ハ法科医科工科文科

理科農業商業等ノ分科ヲ設クルコトヲ得」とうたうが、このうち「商業」分科の設置を唱えた言説に筆者が接したのは今回が初めてであり、しかもそれが大阪における議論であったことに、小さな発見のよろこびを禁じ得ない。

またこのとき第三高等中学校の中島校長と平山幹事が、大阪府下の吹田なども検分したという報道にも初めて出会った。京都設置がかなりの程度本決まりになっていたようではあるが、大阪の線も完全に消えてはおらず、しかも以前に指摘した阿倍野村近辺とは別に、北摂地域も候補化していた事実が興味深い。

結局はこの10日ほど後になって、京都府会で地方税捻出が決まり、月末の文部省告示第3号において、第三区高等中学校は京都に置かれることが公示される。

『内外新報』の一記者が「京都に奪い取られるな」と檄をとばしたに過ぎず、結果的には、大阪府民・府会の高等中学校保持運動など生じもしなかったのが実態だろう。だが、かつて本ニューズレター第22号(2008年6月30日)で紹介したように(「第三高等中学校大阪理科分校考—鹿児島県中学造士館職員の巡視記録による—)、翌年には、より現実味を有する「第三高等中学校大阪理科分校」設置も学校側において模索されていた。「商業」分科とは、いかにも大阪ならではの思いつきであるが、本記事は、高等中学校の専門分科機能は多様な期待を集め得たことを物語るものであり、医学部問題から導き出した「大阪＝高等中学校(官立学校) いらす」との一元的理解にいささかの修正の必要を迫るおもしろさを有するのである。

[個人研究]

九州地区から東北地区研究へ、そしてその先の展望をめざして

小宮山道夫

本研究会に関わらせて頂き、多くのものを得ました。共同研究のおもしろさ、難しさ、研究に対する取り組み方、楽しみ方、視野の広げ方、焦点の絞り方、視点の転換の仕方など、そして同じ時代・対象に関心を寄せるものが集まるからこそ持つ感覚や理解を共有できる研究者と出会い、さらに人脈が広がっていったことは大きかったと思います。会員はもちろんのこと、関わらせて頂いた皆さんに感謝しています。

ただそれらに比して私個人が研究会や周囲に寄与できた部分があまりにも小さく狭かったことを残念に思っています。研究会としては一つの区切りを迎えましたが、これから少しずつ関係者に貢献していきたいと改めて思っている次第です。

現在取り組んでいる研究の目的は、高等学校創設の教育政策的意図および近代教育制度史上の役割に着目し、従来明らかにされてこなかった尋常中学校との接続関係（アーティキュレーション）の形成過程、教育政策の地方における受容過程について実証的に考察することです。そのためには地方に散在する尋常中学校関係文書を用い、教育内容の分析と生徒の修学実態分析を通じて、学校水準の整備過程を明らかにしていく必要があります。これまでは第五高等学校を事例に九州各県の調査に取り組んできましたが、昨年からは第二高等学校の再調査のため、東北各県を訪れることにしています。

本来的には近代の医学教育史をまとめるつもりで足を踏み入れた高等学校研究ですので、本丸の医学教育史を目指しているのですが、本研究会に啓発されて調査研究を重ねることを通じ、平成 20～21 年度には

科研費・若手研究（B）（課題番号 20730501）「1880年代教育政策の動向と第五高等学校の実態に関する研究」を、続く平成 22～24 年度に同じく若手研究（B）（課題番号 22730621）「学校間接続関係の形成と近代教育政策の地方における受容過程に関する実証的研究」を、さらに現在、平成 25～27 年度科研費・基盤研究（C）（一般）（課題番号 25381030）「近代教育政策定着過程における中央と周縁に関する研究—地域の人材育成と高等学校—」を得て取り組むことができています。こういった事情も手伝って、医学教育に関心を寄せつつも、地方のアーティキュレーション形成過程研究のため、中央（大都市圏）から離れた九州地域、そして東北地域に手を広げはじめています。

高等学校の果たした歴史的意義をその機能とともに明らかにするためには、尋常中学校の教育内容との比較が不可欠ですし、さらに、異なる地域間、特にこれまで検証してきた九州地区と東北地区という、東京・大阪・京都の3府の属す大都市圏から離れた地域の比較検討を行うことの必要性を強く認識しています。アーティキュレーション形成に関していえば、生徒の進学ルートの確定過程には国家の教育政策的意図と地域の教育需要との相互作用が大きく働いていたとの仮説のもと、高等学校の実態を手がかりにその確定のメカニズムを明らかにしたいと思っています。

研究会発足当時、若手中心で不安定な身の上である会員も多く、研究費が足りないことを補うために共同で基盤研究をとろうと鼻息を荒げていた頃を思うと、研究会で共同科研もと、個人科研もとることができている信じられない状態にあります。初期の共同科研

申請は事情により私が代表者にならざるを得ず、ほとんど科研申請代表者のせいでしたが、応募しては落とされ、ちぎっては投げられ、ちぎっては投げられの連続。もうどうしたら申請が通るのかもわからず、大風呂敷を広げてみたり、変に数字に細かくなってみたり、思いつく工夫をすべて取り入れたところ、所属する大学内の科研取得アドバイザーの一人からは、書き方が「あざとい」と切って捨てられる始末。どうしたら良いのかわからなくなってしまっているからこそ助言を求めたのに、心を大きく折られた苦い経験があったことも、この原稿を書きながらふと思い出しました。

話は横道にそれましたが、本研究会での活動を通じて得た 1880 年代教育史研究の感触は、漸く研究の入口にたどり着いた、というものです。なぜ高等中学に進もうなどと考える者がいたのか、送り込む親は何を

考えていたのか、国策としてどうしたかったのか、地域は新制度や新設校をどのように都合よく利用してやろうと思っていたのか、政界、財界、宗教界その他の集団はどうしたかったのか、旧藩領主や士族層はどう考えていたのか。考えていけばきりはありませんが、その当時および近代以前の社会構造の中に、日本の特殊な学歴信仰の原初形態が深く根ざしているとの匂いを感じ取ったのみです。前途多難であり、自身の歩みの遅さ（能力の低さともいう）を考えれば、登り詰めるべき頂上を目にすることすらできるのかどうか、甚だ不安ではありますが、会員の皆さんに置き去りにされないよう、そしてどこかの地点ではリードできるように引き続きこの時期のアーティキュレーションにこだわっていきたいと思います。

[個人研究]

文部省廃止論から問う近代日本教育の位相

鄭 賢 珠

1871 年文部省創設以降、教育に対する理念（学問の独立など）や、教育行政組織に対する批判などから、文部省の規模を縮小ないし廃止すべきという様々な論説が登場してきた。

このような明治期の文部省廃止論に関する論議は、時には教育に対する理念（学問の独立）をめぐって、時には教育行政組織に対する批判から、文部省の規模を縮小ないし廃止すべきであるというものや、教育行政を内務省内の一局化するか、内閣直轄化、あるいは内閣から独立すべしという構想が登場してきた。

1880 年代に登場した主な文部省廃止論は次のとおりである。

- | | |
|-------------|---|
| 1886 年 11 月 | 海防費問題 |
| 1888 年 1 月 | 「人心収攬」問題（農商務省・通信省も廃止対象） |
| 1889 年 3 月 | 『国民之友』政費節減のための内務省移管論 |
| 4 月 | 三宅米吉「文部省ヲ廃スベシト云フ論」福沢諭吉「国会準備の実手段」『時事新報』一経費節減のための内務省移管説 |
| 1890 年 6 月 | 海江田信義「学政院構想」 |
| 8 月 | 文部省を政治局外に独立させるべきとの建議に対して、内閣では山田頭義、松方正義、西郷従道など枢密院 |

では東久世通禧、副島種臣、福岡孝弟、佐野常民、元田永孚などの顧問官が賛成したとの記事

- 1891年10月 貴族院勅選議員渡正元演説
 11月 改進黨「官制改革案」作成—専門・普通学務局合併し文部省縮小
 12月25日 大成会「官制改革上奏案」
 1892年11月22日 長谷川泰の質問演説「文部省化物屋敷論」

従来、第1次伊藤博文内閣期（1885年12月22日～1888年4月30日）に、内閣において海防費問題（1886年）、「人心収攬」策の解決（1888年）から文部省廃止が構想されたが、海防費献金や大隈入閣が推進されるようになると、廃省論も立消えたことは広く知られていることであった。また、その後の廃省論は、西村茂樹や海江田信義など「宮中」関係者、在野の教育関係者、帝国議会議員の発言や活動から紹介され、

こうした文部省廃止論者の地位または思想的立場との関係から、教育世論の官化主義へ批判（梶山雅史、1972年）、教育行政組織改革構想（神田修、1973年）、天皇制教育体制確立過程（久木幸男、1985年）といった側面から説明されてきた。

しかし、そうした説明では、そもそも第1次伊藤博文内閣期に文部省の問題と関係ない理由から文部省廃止論がなぜ提起されたのか、そうした提起を可能にしたのは何だったのかという、近代日本の教育をめぐる権力構造や教育行政の位相を理解するための視角が抜け落ちているのではないだろうか。

それは、文部省は国家建設・政治権力の中核から遠い弱小省であるという現代的な認識が明治初期からの文部省廃止をめぐる議論にもそのまま適応され、疑問もなく、鵜呑みにされていたのではないだろうか。なぜ近代日本の建設に教育は重大であるとされながらも教育財政や教育行政に対してこのような処遇がおこなわれたのか。様々な疑問が残る。

[史資料紹介]

東京大学駒場博物館を再訪して

富岡 勝

3月20日に東京大学駒場博物館を久しぶりに訪問し、第一高等中学校（1894年より第一高等学校）の史資料を閲覧した。手許の記録を見ると、研究会のメンバーで訪問したのが2008年3月14日と8月1日の2回、その後一人で訪問したのが2009年11月27日と2010年4月16日のことであった。したがって今回は約4年ぶりの訪問ということなるが、この4年間に同博物館では史資料の整理が大幅に進んでいた。

ちょうど今回の訪問の数日前、同館ホームページのなかの「デジタルアーカイブ」のコーナーにおける「第

一高等学校資料目録」の公開と資料の閲覧受付が始まったところであった。

(<http://museum.c.u-tokyo.ac.jp/d-archive.html>)

おかげで幸運にも筆者は、この目録を利用して同館の資料閲覧申請書と文献複写等申込書に初めて記入した利用者となった。また同館の折茂氏から史資料の整理方針などについて詳しくお聞きする機会を得ることができた。

この目録には原則として同館が所蔵する一高関係の史資料の全てが記載されているが、部分公開や非公開

の指定がついている史資料もある。これは個人情報保護や史資料の保存状況などのためのやむをえない措置だろうと思われる。非公開であっても史資料存在の有無を確認できるだけでも利用者にとって有益であろう。

博物館の役割が主にモノ資料を扱うことにあるといっても、実際には歴史的史料も合わせて保存されることがあるから、博物館が収蔵庫内の史資料の閲覧の便宜を図ってくれるというのは、歴史的の研究をする上で大変有り難い傾向である。

今回は半日しか調査できなかったが、目録でその存在を初めて知って閲覧した二つの史資料があったので簡単に紹介しておきたい。

第一は、「倫理」と記された史料（請求記号は(3)D8）である。閲覧申請をして中身を確認すると、冒頭に「明治廿二年九月ヨリ同廿三年六月迄第一年生倫理科講義実施」に書かれており、講義概要と思われる。

第一高等中学校に赴任した木下広次が倫理科に力を注いだことは拙論「第一高等中学校寄宿舎自治制導入過程の再検討（その二）—木下広次教頭就任の背景と就任当初の方針—」（『一八八〇年代教育史研究年報』第2号、2010年）で触れたので、一高の倫理科の実際の内容が分かるのなら興味深いと思って閲覧した。閲覧して驚いたことに、1890年（明治32年）の一年生むけ倫理科授業では、寄宿寮（第一高等中学校では1890年より寄宿舎のことが寄宿寮と呼ばれている）のことが随所に取り上げられていたことがわかった。例えば、第1回と第2回の講義として以下のように記されている。

第一回

- 一 倫理科ヲ学ブニ就テノ注意
- 一 新入学ニ就テノ注意

一 本校教育ノ方針

一 倫理科ノ目的寄宿寮ノ目的及両者ノ関係

第二回

一 寄宿寮ノ歴史

一 自治の解釈 個人ノ自治ト団体ノ自治トノ関係
自治ト放縦トノ別

第1回で倫理科の授業と寄宿寮との関係が密であることが示され、第2回は、まるごと「寄宿舎生活のための倫理」にあてられていることがわかる。

では、同校の一年生用倫理科授業は毎年このような内容で実施されたのかどうか。あるいは、この年が特別だったのだろうか。あるいは、1900年から同校で懸案であった皆寄宿舎制が実施されたことと関連があるのだろうか。

同校の他の年度の倫理科授業についての史料は、目録上は見つからなかったので、毎年こうした内容の倫理科授業が実施されていたかどうかは不明である。

この明治32年（1899年）の一年生用倫理科授業の性格を考える上でヒントになるとと思われるのは、1890年の第一高等中学校寄宿舎自治制開始に中心的役割を果たした生徒の一人であった赤沼金三郎が、明治30年代に帝国大学大学院に在籍しながら第一高等学校で倫理の授業を担当していたらしいということである（岡村司「文学士赤沼金三郎君伝」『天心遺響』1902年、28頁）。今後この件について、さらに史料を探しながら検討していきたい。

第二に出会った史資料は、一枚の写真である。同館では近年、写真資料についても保存方法を整備したため、公開が可能になったそうである。その写真は、明治23年11月撮影の「校友会」と題した写真（請求記号(12)B3）で、目録の備考欄に「校友会創立委員写真」

と記述されている。生徒15名と教員と思われる人物5名が映っており、その内の1名は約40歳の木下広次である。おそらく1890年11月に発足した第一高等中学校校友会の生徒委員たちと役員をつとめた教員たち（会長は木下校長）を撮影した写真であると想像することができる。管見ではこれまでの研究や刊行物には登場していない貴重な写真だと思われる。今後この写

真を資料として活用できるように、撮影されている人物の特定などを進めていきたい。

すでにいったん調査の終わった場所であっても時間を置いて訪問してみるとまた新たな発見があるものだと今回の調査で実感した。

ご関心をお持ちの方は、ぜひ同館のホームページにアクセスし、訪問準備をしていただければと思う。

[活動記録]

「ニューズレター総目次（第25号～第45号）」

（作成）三木 一 司

第1号から第24号までの総目次（鄭会員・田中会員の作成）は、第24号に収録。
（ニューズレター各バックナンバーは、研究会HPで公開）

<p>〈25号〉2009年4月15日 巖平著『三高の見果てぬ夢—中等・高等教育成立過程と折田彦市』—先行研究と新たな知見との間—／荒井明夫 学区の思想（補遺）／神辺靖光 東京大会（2月27日）の概要／谷本宗生・田中智子 進文学社〔進文学舎〕について（補遺）／谷本宗生 第一高等中学校の寄宿舎自治制度成立過程の再考に向けて／富岡勝 高等学校医学部設置と府県／田中智子 広島における中学校令公布時の中等学校改革計画について／小宮山道夫</p>	<p>〈26号〉2009年7月15日 学区の思想（補遺2）／神辺靖光 東京・高円寺退会（6月27～28日）報告の概要／谷本宗生 諸学校令体制の再検討—研究史の整理から／田中智子 第一高等中学校の寄宿舎自治制導入過程の再考（仮）にむけて／富岡勝 第三次五高関係史料調査報告／小宮山道夫 正木直彦『回顧七十年』（1937年）を読んで—上京遊学した青年子弟の動向を探る—／谷本宗生 第三高等中学校教頭松井直吉の活動（3）／鄭賢珠</p>
<p>〈27号〉2009年11月15日 学校をめぐる逸話と風景(1)／神辺靖光 大阪府立商業学校の設立(2)／田中智子 第一高等中学校の例規集より／富岡勝 教育史学会第51回大会湯川嘉津美氏発表「教育令期の府県聯合学事会に関する研究」(2007)について／田中智子 高等学校関係者の欧州留学・派遣／鄭賢珠 外山正一の逸話について／谷本宗生</p>	<p>〈28号〉2010年1月15日 学校をめぐる逸話と風景(2)／神辺靖光 教育史学会第53回大会湯川嘉津美氏発表「1880年代における府県聯合学事会の開催とその意義」(2009)によせて—時期区分の問題を中心に—／田中智子 東京大会（11月29日）報告の概要／小宮山道夫 研究年報第1号編集について／富岡勝 小山健三と第五高等中学校医学部設置のかかわり—『小山健三伝』（1930年）を読んで—／谷本宗生 『第二高等中学校事務例規類纂』について／富岡勝</p>
<p>〈29号〉2010年4月15日 学校をめぐる逸話と風景(3)／神辺靖光 木下広次についての木下正雄・道雄の回想／富岡勝 文部省直轄学校関係者の欧州留学・派遣(2)／鄭賢珠 東京大会（2月27日）報告／富岡勝 諸学校令体制下における高等教育体制の再編—仙台における文部省・県・キリスト教勢力の競合—／田中智子</p>	<p>〈30号〉2010年7月15日 学校をめぐる逸話と風景(4)／神辺靖光 これからの調査研究の在り方を考える—高等学校設置区域・第四区の場合—／谷本宗生 第三区設置区域内府県連合委員会の再検討／田中智子 第五高等中学校第一回入学試験及第者の存在／小宮</p>

<p>長谷川時雨『旧聞日本橋』(1935年初版、1971年復刻)の一節—明治初めの動向—/谷本宗生</p>	<p>山道夫 東京大会(5月30日)の概要/鄭賢珠 7月11日の研究会打合せの記録概要/谷本宗生 松田為常に関する回想録の紹介/富岡勝</p>
<p>〈31号〉2010年10月15日 学校をめぐる逸話と風景(5)/神辺靖光 大阪府立商業学校の設立(3)/田中智子 服部一三の海外出張(1)/鄭賢珠 九州地区尋常中学校史料調査報告(その1)/小宮山道夫 帝大寄宿舎に関する読売新聞記事/富岡勝 『官庁往復』(1899年)の目次(抄)—帝国大学体制を考える手がかり—/谷本宗生 「教育史研究用カードノート」の試み(その2)/富岡勝</p>	<p>〈32号〉2011年1月15日 学校をめぐる逸話と風景(6)/神辺靖光 第一高等中学校生徒南雲庄之助の回想/富岡勝 東京貸本社について(補足)/谷本宗生 明治期における海外留学・派遣の統計データ/鄭賢珠 11月28日の研究会について/谷本宗生 高等中学校制度と第三区内府県—岐阜・三重・和歌山の場合—/田中智子</p>
<p>〈33号〉2011年4月15日 学校をめぐる逸話と風景(7)/神辺靖光 東京開成学校の図書に関する規定について/谷本宗生 新島襄と徳富蘇峰による教育的「自治」論/富岡勝 大会の概要(2011年2月20日)/田中智子 高等中学校制度と第三区内府県(2)—滋賀の場合—/田中智子</p>	<p>〈34号〉2011年7月15日 学校をめぐる逸話と風景(8)/神辺靖光 工部大学から帝国大学工科大学へ/谷本宗生 大会の概要(2011年6月5日)/小宮山道夫・富岡勝 高等中学校制度と第三区内府県(3)—広島・山口の場合—/田中智子 近畿大学での大学アーカイブズ立ち上げを目指して/富岡勝</p>
<p>〈35号〉2011年10月15日 学校をめぐる逸話と風景(9)/神辺靖光 「分校」の思想/田中智子 コロキウムの概要/富岡勝 コロキウム(10・2)を終えて/谷本宗生 コロキウムに参加して/小宮山道夫 教育史研究における1880年代研究についての二・三の断想/荒井明夫 熊本における木下家関係史料の動向/富岡勝</p>	<p>〈36号〉2012年1月15日 学校をめぐる逸話と風景(10)/神辺靖光 本校分校支校、学校配置網覚書(1)/神辺靖光 外交史料館所蔵資料調査(1)「文部省八年計画調査書」緒言の紹介/鄭賢珠 『東京大学法理文学部年報』から—生徒の健康をめぐる—/谷本宗生 2011年の九州地区調査体験/小宮山道夫 佐賀県尋常中学校の有志による校友会/富岡勝 大会の概要(2011年12月18日)/谷本宗生 高等中学校制度と第三区内府県(4)—徳島・鳥取の場合—/田中智子 木下広次をめぐる人びと/富岡勝 1880年代教育史研究への思い/荒井明夫</p>
<p>〈37号〉2012年4月15日 学校をめぐる逸話と風景(11)/神辺靖光 本校分校支校、学校配置網覚書(2)/神辺靖光 木下広次をめぐる人びと(1)—木下助之について—/富岡勝 本郷・帝国大学の周辺地域について/谷本宗生 高等中学校経費地方税支弁停止への過程/田中智子 定例大会の概要(2012年3月18日)/谷本宗生 特別例会の概要(2012年4月7日)/田中智子</p>	<p>〈38号〉2012年7月15日 学校をめぐる逸話と風景(12)/神辺靖光 木下広次をめぐる人びと(2)—木下助之について(その2)—/富岡勝 加藤弘之の勉強法のススメ/谷本宗生 千葉県(第一高等中学校医学部)調査/小宮山道夫 例会の概要(2012年6月23日)/谷本宗生 高等中学校制度と第三区内府県(5)—高知県の「一大学」設立構想—/田中智子</p>
<p>〈39号〉2012年10月15日 学校をめぐる逸話と風景(13)/神辺靖光 本校分校支校、学校配置網覚書(3)/神辺靖光 木下広次をめぐる人びと(3)—木下真弘について(そ</p>	<p>〈40号〉2013年1月15日 学校をめぐる逸話と風景(14)/神辺靖光 本校分校支校、学校配置網覚書(4)/神辺靖光 明治前期の数学教科書(1)/富岡勝</p>

<p>の1) 一／富岡勝 第五高等中学校生徒姿勢標準の背景について／谷本宗生 高等中学校経費地方税支弁停止への過程(2)／田中智子</p>	<p>教育家は学生の健康・衛生に刮目せよ！(松山誠二の提唱)／谷本宗生 高等中学校経費地方税支弁停止への過程(3)／田中智子 例会の概要(2012年12月9日)／谷本宗生 第五高等中学校と九州各県尋常中学校との連絡関係に関する資料について／小宮山道夫</p>
<p>〈41号〉2013年4月15日 学校をめぐる逸話と風景(15)／神辺靖光 本校分校支校、学校配置網覚書(5)／神辺靖光 健康法・冷水養生法の提唱／谷本宗生 京都府下大村達斎の医学校の名称について／田中智子 例会の概要(2013年2月20日)／谷本宗生</p>	<p>〈42号〉2013年7月15日 学校をめぐる逸話と風景(16)／神辺靖光 「本校分校支校、学校配置網覚書」連載完結によせて—もうひとつの同志社「分校」、その戦略的性格—／田中智子 松本特別例会の概要(2013年6月29日)／谷本宗生 例会の概要(2013年7月13日)／佐喜本愛 年報5号および科研報告書執筆構想について／小宮山道夫 寄宿舎自治制はいつ第一高等中学校の公式方針になったのか／富岡勝 第一高等中学校摂生室医院・医学士山県正雄の少年養生訓／谷本宗生</p>
<p>〈43号〉2013年10月15日 学校をめぐる逸話と風景(17)／神辺靖光 第一高等中学校入学試業科目の画期(1888年)について／谷本宗生 第一高等中学校入学試業科目変更の波紋について—幸田成友の回顧録から—／谷本宗生 再び森有礼へ—佐藤秀夫氏の所論を素材に—／田中智子 木野主計『木下鞆村の生涯とその魅力』について／富岡勝</p>	<p>〈44号〉2014年1月15日 学校をめぐる逸話と風景(18)／神辺靖光 第一高等中学校(1887年)の体操担当教員らの顔ぶれについて／谷本宗生 高等中学校生徒らの健康・衛生環境について—眼病予防・姿勢矯正・体操遊戯—／谷本宗生 続・再び森有礼へ—郷里・薩摩(鹿児島)の位置を問う—／田中智子 旧制麻布中学校校友会雑誌を活用した教育と研究—麻布高等学校水村暁人氏の実践—／富岡勝 科学研究費補助金研究成果報告書の刊行について／小宮山道夫</p>
<p>〈45号〉2014年3月31日 一八八〇年代教育史研究の成果と今後の研究課題／荒井明夫 学校をめぐる逸話と風景(19)／神辺靖光 なにが課題として残されたか—私の問題意識—／谷本宗生 第三高等中学校大阪商業科分校考—「商都大阪」の淡くはかなき夢—／田中智子 九州地区から東北地区研究へ、そしてその先の展望をめざして／小宮山道夫 文部省廃止論から問う近代日本教育の位相／鄭賢珠 東京大学駒場博物館を再訪して／富岡勝 ニューズレター総目次(第25号～第45号)／三木一司 1880年代教育史研究会活動年表(2008年9月～2014年3月)／小宮山道夫・富岡勝</p>	

[活動記録]

1880年代教育史研究会活動年表（2008年9月～2014年3月）

（作成）小宮山 道夫・富岡 勝

研究会発足（2001年9月）から2008年8月までの年表（鄭会員・田中会員の作成）は第23号に収録。

<第四期 2008.9～2010.3 研究年報発刊>

2008.9.30	ニューズレター第23号刊行
2009.1.15	ニューズレター第24号刊行
2009.2.27	第19回研究会（東京大会 於：高円寺 神辺・小宮山・田中・谷本・富岡） 個別報告
2009.4.15	ニューズレター第25号刊行
2009.6.27・28	第20回研究会（東京大会 於：高円寺 荒井・神辺・小宮山・田中・谷本・富岡・三木） 高等学校関係史料集作成の相談、研究年報刊行の相談、個別報告
2009.7.15	ニューズレター第26号刊行
2009.10.1	研究年報第1号刊行
2009.11.15	ニューズレター第27号刊行
2009.11.29	第21回研究会（東京大会 於：高円寺 荒井・神辺・小宮山・佐喜本・田中・谷本・富岡） 研究年報第1号合評会および第2号刊行に関する相談
2010.1.15	ニューズレター第28号刊行
2010.2.27	第22回研究会（東京大会 於：高円寺 荒井・神辺・田中・谷本・富岡） 研究年報第2号執筆構想、来年度研究会活動方針の検討
2010.3	一八八〇年代教育史研究会編『高等学校基礎史料集』（研究会会員用）完成

<第五期 2010.4～2014.3 科研費研究会として>

2010.4.15	ニューズレター第29号刊行
0.5.30	科学研究費補助金「1880年代におけるエリート養成機能形成過程の研究 ―高等学校成立史を中心に―」（平成22～25年度、基板研究(B)、研究代表者 荒井明夫）2010年度第1回（通算第23回）研究会（東京大会 於：高円寺 荒井・神辺・鄭・田中・谷本・富岡） 研究年報第2号の執筆構想発表および今年度研究計画打ち合わせ
2010.7.11	2010年度科研費第2回（通算第24回）研究会（東京大会 於：高円寺 荒井・神辺・小宮山・佐喜本・鄭・田中・谷本・富岡・三木） 研究年報第2号の執筆構想発表および今年度研究計画打ち合わせ
2010.7.15	ニューズレター第30号刊行
2010.10.1	研究年報第2号刊行
2010.10.15	ニューズレター第31号刊行
2010.11.28	2010年度科研費第3回（通算第25回）研究会（東京大会 於：高円寺 神辺・小宮山・田中・谷本・富岡） 研究年報第2号書評会、各会員の研究進捗状況報告
2011.1.15	ニューズレター第32号刊行
2011.2.20	2010年度第4回（通算第26回）研究会（東京大会 於：高円寺 神辺・小宮山・田中・谷本・富岡） 本年度科研費執行状況・研究成果報告、研究年報第3号執筆構想報告、来年度科研費研究計画
2011.4.15	ニューズレター第33号刊行

2011. 6. 5	2011年度第1回(通算第27回)大会(東京大会 於:高円寺 荒井・神辺・小宮山・田中・谷本・富岡) 2011年度研究計画検討、研究年報第3号執筆構想確認、教育史学会コロキウムの内容検討
2011. 7. 15	ニューズレター第34号刊行
2011. 10. 1	研究年報第3号刊行
2011. 10. 2	教育史学会(於:京都大学)においてコロキウム「近代日本におけるエリート教育の編成—明治期と大正期との対話」開催。指定討論者:小針誠氏・吉川卓治氏
2011. 10. 15	ニューズレター第35号刊行
2011. 12. 18	2011年度科研費第2回(通算第28回)(通算 回)大会(東京大会 於:高円寺 神辺・田中・谷本・富岡) 教育史学会コロキウムの振り返り、本年度研究成果報告、次年度研究構想報告
2012. 1. 15	ニューズレター第36号刊行
2012. 3. 18	2011年度科研費第3回(通算第29回)大会(東京大会 於:高円寺 荒井・神辺・佐喜本・田中・谷本・富岡・三木) 本年度研究成果報告と次年度研究構想の続き、ニューズレター編集体制の相談
2012. 4. 7	京都特別例会(於:同志社大学臨光館 佐喜本・鄭・田中・富岡) カリキュラム班関連の先行研究検討
2012. 4. 15	ニューズレター第37号刊行
2012. 6. 23	2012年度科研費第1回(通算第30回)大会(東京大会 於:高円寺 神辺・小宮山・佐喜本・田中・谷本・富岡) 研究年報第4号執筆構想報告
2012. 7. 15	ニューズレター第38号刊行
2012. 10. 1	研究年報第4号刊行
2012. 10. 15	ニューズレター第39号刊行
2012. 12. 9	2012年度科研費第2回(通算第31回)大会(東京大会 於:高円寺 荒井・神辺・小宮山・佐喜本・田中・谷本・富岡) 研究年報第4号合評会、研究年報第5号と科研費報告書などについて相談
2013. 1. 15	ニューズレター第40号刊行
2013. 2. 20	2012年度科研費第3回(通算第32回)大会(東京大会 於:高円寺 荒井・神辺・佐喜本・田中・谷本・富岡) 科研費報告書構成案検討、本年度研究成果報告、次年度研究構想報告
2013. 4. 15	ニューズレター第41号刊行
2013. 6. 29	松本特別例会(於:松本市・旧制高等学校記念館 荒井・田中・谷本・富岡) リニューアルした旧制高等学校記念館展示の見学、田中会員による旧制高等学校記念館夏期教育セミナー講演「高等学校制度と地方都市」の構想報告
2013. 7. 13	2013年度科研費第1回研究会(通算第33回)大会(東京大会 於:高円寺 神辺・小宮山・佐喜本・田中・谷本・富岡・三木) 研究年報第5号執筆構想報告
2013. 7. 15	ニューズレター第42号刊行
2013. 10. 1	研究年報第5号刊行
2013. 10. 15	ニューズレター第43号刊行
2014. 1. 15	科研費研究成果報告書刊行、ニューズレター第44号刊行
2014. 3. 31	ニューズレター第45号刊行、研究会解散

[お知らせ]

研究年報と科研費報告書の頒布継続について

荒井代表の挨拶にあるように、本年3月末日をもって本研究会は解散することになり、ニューズレターも本号(第45号)をもって終刊となります。長年にわたり本ニューズレターにご注目くださり有り難うございました。時には本会のホームページからニューズレターを探して熱心に読んで下さった方もあり、感謝しています。

今後も当分の間、『一八八〇年代教育史研究年報』(第2号～第5号)と平成22～25年度科学研究費補助金(基盤研究(B)「1880年代におけるエリート養成機能形成過程の研究—高等学校成立史を中心に—」(研究代表者荒井明夫)研究成果報告書をご希望の方に、送料(相当分の切手)のみのご負担で送付いたします。ご

関心をお持ちの方は、下記の連絡先(富岡)までご一方ください。品切れの際はご容赦ください。

旧制高等学校記念館第19回夏期教育セミナーについて

今年も8月30日(土)～31日(日)の日程で、長野県松本市の旧制高等学校記念館の夏期教育セミナーが開催されます。一日目は瀧井一博さんによる基調講演、二日目は若手を中心とした研究者による旧制高校関連の研究発表が行われる予定です。旧制高校関連のテーマをめぐる学生・研究者・旧制高校出身者・市民の交流の場として貴重な場だと思います。ご関心をお持ちの方は、ぜひご参加をください。

「1880年代教育史研究会」ニューズレター 第45号 2014年3月31日発行

<研究会連絡先・研究年報バックナンバー送付依頼先>

富岡 勝 「1880年代教育史研究会」事務局

〒577-8502 東大阪市小若江3-4-1 近畿大学教職教育部 富岡勝研究室 気付

E-mail: tomiokamasa@kindai.ac.jp

<HP> <http://home.hiroshima-u.ac.jp/komiyama/1880/>